

Y09a 市民科学で読み解く諏訪天文同好会の100年

大西浩次（国立長野高専）、渡辺真由子（茅野市八ヶ岳総合博物館）、陶山徹（長野市立博物館）、大西拓一郎（国立国語研究所）、早川尚志（名古屋大学）、野澤聡（獨協大学）、衣笠健三（国立天文台野辺山）、長野県天文文化研究会、「長野県は宇宙県」連絡協議会、「長野県は宇宙県」関係者ほか

「市民科学によって天文文化はいかに誕生し、何を生み出してきたか」という問いを出発点として、「長野県は宇宙県」に関わる100年間の天文学や天文に関わる文化的な活動、すなわち、天文文化の解明を目指す市民科学プロジェクトを進めている。この研究対象の一つとして、今年で設立100年となる諏訪天文同好会の設立時の観測的研究や星空環境保護活動などの調査を進めている。この過程で、市民天文同好会でありながら、観測的研究などを通じて研究者との多彩な交流が明らかになっている。これらの調査研究から、今後、日本の天文学の黎明期のプロアマ交流などが、市民科学の誕生と発展にどのように寄与したのかを解明できると期待している。

そこで、これまでの調査研究をまとめると共に、1920年代から現在までの市民科学的な研究やプロアマ交流などをテーマにした2つの企画を実施する。その一つは、2022年11月18-19日の2日間で開催する「諏訪天文同好会設立100周年記念シンポジウム」である。1日目は「市民科学で読み解く天文史」として、太陽黒点観測、変光星観測、長野県の天文史の3つのテーマについて、長野県における過去百年の太陽観測データの活用、諏訪天文同好会の変光星観測、日本の変光星観測の歴史、諏訪天文同好会の発足経緯と活動、日本の近現代天文史との関わりなどについて議論する。2日目には、市民向けの「諏訪天文同好会設立百周年記念講演会」を開催する。もう一つの企画は、「長野県の天文文化の100年(仮)」と題する巡回展である。2022年秋から、茅野市、長野市、伊那市など長野県各地で行う予定である。これらの活動をスタートに、3年計画で市民科学の黎明期の解明を試みる。